第1号は東京通信員

八重山毎日新聞 通信員列伝《1》

春の新聞週間企画

本紙には東京、大阪、福岡の大都市と郡内の各島々、そして台湾にも通信員がいる。1967年の東京を第1号に1980年代前後に各地区に次々配置された。しかし手当はほんのわずか。ほとんどの方々がほぼボランティア状態で活動してもらっているのが実情だ。来年3月創刊75周年を迎える本紙の今日の発展は、こうした通信員の皆さんの「縁の下」の支えも大きい。そこで「春の新聞週間」に当たり、改めて各地区の歴代通信員にスポットを当てることにした。（元編集長・上地義男）

黒島清本社社長（当時）から「八重山毎日文化賞」を贈られる本紙第1号通信員の三木健さん＝1989年12月

57年の歴史

本紙の通信員制度は、57年前の1967年3月、日米で沖縄の返還交渉真っ盛りの東京に、石垣市登野城出身の三木健さんが琉球新報記者として赴任した際委嘱されたことに始まる。

その後1972年の本土復帰をはさんで約10年後の1970年代後半から80年代に入って竹富、黒島、与那国、西表東・西部、波照間、小浜、大阪、那覇と各地区に次々通信員が委嘱された。

多士済々総勢50人余に委嘱

島々の発展に貢献

その数は名前が判明しているだけで2024年4月現在総勢50人余に上る。今後各地区ごとに順次紹介の予定だが、その経歴をみるとまさに多士済々、いずれも優秀な人たちぞろいだ。

その方々が本土や各島々の多種多様な情報を発信。それが八重山郡民の大きな情報源である八重山毎日新聞の紙面を飾るとともに本土の郷友とふる里をつなぎ、各島々で地域づくりや地域の発展に大きな役割を果たしてきた。

ここで名前が判明しただけでもとしたのは、当初通信員はほとんどが匿名を希望し氏名の記載がなかった。そのため今回の企画に当たり調べたが、残念ながら分からずじまいの方がいたからだ。

本紙は終戦5年後の1950年3月に創刊したが、それは今の新聞の3分の2程度の小さなもので、7年後に今の新聞の大きさになった。しかしページ数は相変わらず2ページしかなく、1980年3月の創刊30周年の時4ページ。その後90年の40周年で6ページ、95年に8ページと拡大された。

本紙の通信員が80年代以降に各地区に次々配置されたのは、この紙面拡大と当時の世相が大きく反映されている。

東京通信員に

三木健氏を委嘱

本社では三木健氏（琉球新報東京総局記者＝石垣市宮良出三木恵子さん長男）を東京通信員に委嘱、三月二日号に「東京情報」として「沖縄問題に積極的な発言」を寄稿しました。今後も中央政界内における沖縄問題の動き、社会面的事件の解説記事や八重山関係の興味ある話題などについて月二三回送稿してもらうことになりました。読者の御愛読をお願いいたします

三月四日

八重山毎日新聞社

当時琉球新報東京総局記者だった三木健さんを、東京通信員に委嘱したことを伝える八重山毎日新聞社の社告

紙面拡大が転機に

八重山毎日新聞 通信員列伝《2》

春の新聞週間企画

薄給のボランティア

本紙は石垣島を拠点に竹富町、与那国町の八つの有人離島をエリアとする日本新聞協会加盟のローカル紙であり、地域紙だ。しかし教員や公務員などを主にわずか数百部の購読者でスタートした本紙が、記者を各離島に配置することなど、紙面もわずか2ページで記事の量も限定されるし到底不可能。

そんな状況下で当初本紙は記者2、3人で何とかやりくりしながら新聞に対するニーズに応えて活字をそろえ、機材や設備を整え、そして1968年には時事通信に加盟。全国や海外、そして沖縄県内のニュースは同通信の配信記事で対応できるようになった。

そして肝心の地元の記事は、その後3～5人に増えた本社記者が石垣島を中心に取材。竹富町、与那国町の離島地域は大きな出来事や祭事、イベントがあるごとに記者を派遣して対応してきた。

そういう中で1980年の創刊30周年を機にページ数が4ページと一気に2倍になり、当然記事の需要もそれ相当に増えることになった。

本土企業に反発

加えて当時は世相的にも本土復帰前後に横行した本土企業の土地買い占めに若者たちが反発。石垣島をはじめ西表、竹富など各島々で本土企業の観光開発に対する反対運動や土地を守る運動、島おこし運動が盛り上がり、一方東京、大阪でも郷友会活動が活発化。各島々、地域でメディアへのニーズが高まっていた。

しかし、かと言って零細企業が直ちに記者を何人も増やせるものでない。そこでニーズが急速に高まったのが通信員。

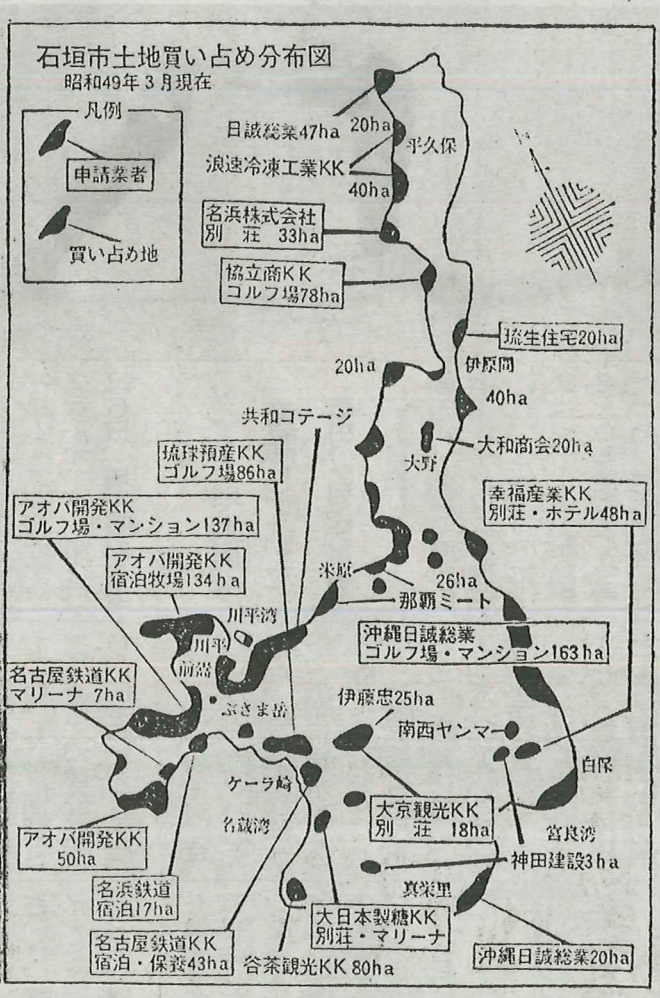
ニーズ高まるも確保難航

離島地域は、各記者らも知り合いの島の人々に依頼するが、「島のためになるなら」「島の発展のためにぜひ必要」と積極的に引き受けてくれる人がいる一方で、当時通信員はなじみが薄い上に手当がほんのわずかのボランティア的な仕事のため、「文章書くのが苦手だから」などとなかなか引き受けてもらえなかったのが現状だった。

そのためほとんどの島で2000年以前は散発的に通信員不在の期間が多く目につく。

そんな中で大きな手助け、戦力となったのが本土から移住してきた皆さんと各島の学校だ。

（元編集長・上地義男）



“虫食い状態”で石垣島や竹富町の島々が本土企業に買い占められた

移住者が大きな戦力に

八重山毎日新聞 通信員列伝《3》

春の新聞週間企画

島で結婚し通信員に

1972年の本土復帰後沖縄は、本土からの観光客が次々押し寄せ空前の沖縄ブームに沸いた。その観光客の間で「沖縄大好き」の「沖縄病」が流行。それは2001年のNHK朝ドラ「ちゅらさん」や安室奈美恵ら県出身歌手らの活躍などでさらに拍車がかかり、八重山の各離島にも島の自然に魅せられ、あるいは島の人と結婚してそのまま住み着く本土からの移住者が相次いだ。

その皆さんが島の人たちに勧められて「島の役に立てるなら」と通信員を担っている。離島地区ではこれまでに総勢30人余が通信員に委嘱されているが、その半数は移住者の方々だ。本紙にとっては、実にありがたい大きな戦力となっている。一方で移住者の皆さんにとっても、この通信員の仕事が「取材でいろんな場所に出掛け、そこでいろいろな物を見たり聞いたりして、この仕事を通して地域の一員になれたような気がする」(山城まゆみ西表東部地区通信員)と地域に溶け込む一助にもなっている。

さすがに移住歴の長い通信員は、しっかりと地域の信頼を得て地域に根差し、移住者ながら公民館長を務めたり、あるいは婦人会役員、竹富町の社会教育委員、母子保健推進員を務めるなど、それぞれの地域で要職について頑張っている通信員もいる。

学校行事など送稿

2000年以降各地域の通信員はおおむね切れ目なく安定して推移しているが、それ以前は各島で数年間たびたび不在期間が多かった。

その不在期間に本紙が依頼したわけでもないのに、自発的に時折学校行事やPTA関連の記事を先生方が写真を撮り、記事を書いて送稿してきたのが各島の学校だ。

学校側が通信員を通じて、あるいは自らも積極的に記事を出すのは、学校の取り組みアピールもあるだろうが、それ以上に全く歯止めの利かない過疎により年々児童生徒が減る小さな学校で、頑張る子どもたちをたたえ励まし、勇気づけたいという先生方の思いの表れなのだろうと感じる。

八重山の「光と影」―。今年は残念ながら平久保小と古見小が閉校になった。島や地域の「希望の光」をいつまでもともし続けたいと願う。

(元編集長・上地義男)

学校も時折通信員代わり

小西紅さん招き感謝会

波照間小 本紙元通信員 学校情報発信の労ねぎらう

【波照間】波照間小学校(神村進校長)で18日、同校PTA・小西紅さんの感謝会が行われた。

小西さんは昨年まで本紙の波照間通信員。小学校で図書の読み聞かせを行ったり、学習発表会で披露する劇の脚本・演出を行うなど同校に協力している。

平成8年に島へ移り住んだが、子供の進学を機に愛媛県に引っ越すことになった。

感謝会で神村校長は「小西さんは(通信員として)皆さんの活躍を発信してくれた。記事を見れば学校の歴史が分かる」と労をねぎらった。

また児童代表の通事美夏さん(6年生)は「新聞で私たちのことを載せてくれたり、本を読んでありがとうございました」と感謝の気持ちを込めた。

小西さんは「通信員だからこそ行事に参加することができ、皆さん出来た。皆さんが元気の源で、1人ひとりに私から感謝状を渡したい」と感激した面持ちで礼を述べた。

(本比田里奈通信員)

波照間島で行われた本紙元通信員の本明(小西)紅さんの感謝会

記事はメールで瞬時に

「通信員のページ」開設

八重山毎日新聞
通信員列伝《4》
春の新聞週間企画

送稿は郵送か船便

1990年代に入ると本紙は4ページから6ページ、8ページへと紙面が拡大。月に3～4度は1面を東京、大阪をはじめ各離島の通信員の記事で埋め尽くす「通信員のページ」が開設できるまでになった。

それは通信員の皆さんの文章力など技量がアップしたのに加え送稿手段が劇的に改善され、記事や写真がパソコンやスマホのメールでどこからでも瞬時に送信できるようになったことが大きい。

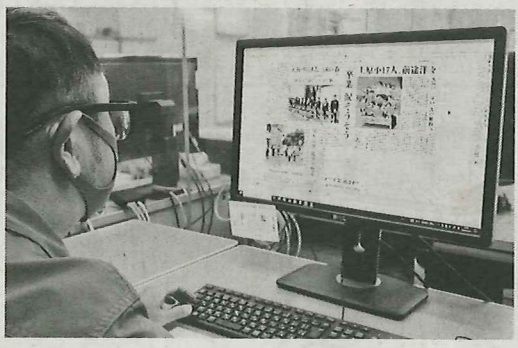
それまで通信員の送稿手段はすべて原稿は手書きでフィルムと一緒に郵送が主。離島も急ぎの時は直接会社に持参するか、あるいはフィルムと原稿を新聞社宛てに船に預けるまことに手間暇のかかるシステムだった。

しかしそれは新聞社にとっても、巻きフィルムを7、8枚に小分けして原稿用紙と一緒に離島の各通信員に送り、通信員から連絡があれば船会社に出向いて原稿とフィルムを受け取り、それをデスクが読んで直しを入れて新聞に掲載するというかなり負担のかかるものだった。

特に担当デスクにとっては、各記者の原稿を見ながら通信員の原稿も見るためかなりの負担となり、多忙の時は通信員の記事は後回し。結果掲載が大幅に遅れ通信員のモチベーション、意欲もダウンというのが当時の状況だった。

「隔世の感」

それが昭和から平成に入った1990年代になると、「新聞づくりもIT時代」になり、パソコン、インターネット、スマートフォンなどの機器の急速な普及で通信員の原稿、写真とも瞬時にメールで新聞社に送られるようになった。



メールで送信された通信員の原稿や写真を画面で整理する編集スタッフ

しかも記事もパソコン画面などで直ちに修正できるため、デスクの負担も減り、互いに相乗効果で月に何回か「通信員のページ」ができるほどに紙面が充実する。それはまさに「隔世の感」だ。

本社の編集スタッフは数少ない人員で「国民の知る権利を守る」「権力を監視し民主主義を支える」など新聞の使命を果たすべく日々奮闘している。そういう新聞にさまざまに彩りを添えているのが通信員の記事だ。

次回以降はそういう島やふる里のためにと頑張る歴代の通信員の皆さんを各地区ごとに順次紹介していきたい。

（元編集長・上地義男）

第一報は「東京情報」

八重山毎日新聞 通信員列伝《5》

春の新聞週間企画

関東地区

三木健さん

東京通信員は三木健さん、有田静人さん、黒島安央さん、小笠原大介さんの4人が務めている。本社初となる通信員が三木健さん（84）だ。石垣市登野城出身で現在浦添市に在住。明治大学後25歳で琉球新報に入社。57年前の1967年に27歳で東京支社に赴任の際、委嘱された。

通信員自ら要望

通信員は本紙の依頼でなく、三木さん自身が「東京では八重山のために何か役立つ情報があるはずだから」と自ら買って出たものという。そこに三木さんの故郷への思いと、その後周知のように沖縄有数のジャーナリストとして活躍するその気概を見ることができる。

三木さんは本土復帰をはさんで約10年間通信員を務めた。第一報は「沖縄問題に消極的な外務省」と1面トップにずばり「東京情報」。その後東京八重山文化研究会も立ち上げ、「東京の八重山研究特集」や「ふる里を考える座談会」の企画記事。さらに郷里での本土企業の土地買い占めと大型観光開発を憂えた「出身者が八重山の自然を守る会結成」「宮良川土地改良事業下期に着工」「大浜信泉氏が肺炎で入院」などの記事を送稿。

30冊余の著書出版

その後本社に戻った三木さんは編集局長、論説副委員長、副社長を歴任し66歳で退職。そしてこれらの仕事、要職をこなしながら「日曜大工」のように取材しまとめあげた著書は30冊余に上る。

その著書は地獄さながらの過酷な強制労働の「西表炭坑概史」に始まって「沖縄返還交渉」「タッちゃんとオカンの沖縄戦」「リゾート開発」「八重山研究の人々」「八重山近代民衆史」「沖縄と色川大吉」「空白の移民史ニューカレドニアと沖縄」などと多岐にわたり、三木さんの探求心の強さ、広さが分かる。

同じ石垣市出身で「沖縄音楽の先駆宮良長包」も著し、音楽祭と音楽賞創設に奔走した。

郷里の石垣市史、竹富町史編集委員を当初から務め、自らも創設に関わった本紙の「八重山毎日文化賞」は1989年に受賞した。戦前にパイン、水牛を導入した台湾人農業者の顕彰碑建立にも尽力した。

（元編集長・上地義男）

沖縄有数のジャーナリスト

郷友とふる里を結ぶ

八重山毎日新聞 通信員列伝《6》

春の新聞週間企画

関東地区

有田静人さん

24日に有田さんの感謝激励会

京東

23年間、郷友会活動を紹介

【東京】八重山毎日新聞東京通信員二十三年を務める「有田静人さんの還暦を祝う感謝・激励会」が二十四日、東京・新宿区の椿山荘で開かれる。

これは二十三年間、郷友会活動や郷友の動きを、人物など広く紹介し、ふる里と郷友を結ぶパイプ役として郷友会長が実行委員となり準備を進めている。当日の参加者は同氏の交友関係のある政界や財界、芸能界、郷友ら三百人が予定されている。

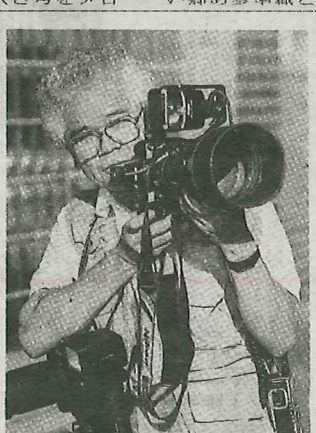
有田さんは竹富島出身。昭和三十二年に八重山毎日新聞入社、翌三十三年カメラと出合い、独学で写真を学ぶ。同三十五年、新年号の一面を飾る写真が採用され、カメラ一筋に。その後、八重山キャンプングラブ結成し八重山の祭り、風土を記録に立ち上げる。また、石垣、竹富、嘉弥真島、小浜、西表を結ぶ「夢の五橋」建設に関する綜合海上（リーフ内）の生物調査。さらには八重山観光絵ハガキに採用される程、幅広く活動。

八重山群島の発展に寄与し、ニュース写真の即べ掲載に渇望を隠さ三十九年、大阪書籍株式会社写真製版に出向。四十一年五月帰省、写真製版技術を導入、遂に十月、夢を実現した。写真取材、製版の両輪で尽力。特に印象に残るのが、佐藤栄作首相の石垣入りで写真グラフで紹介したこと、仲之神島の海鳥を守る活動や台風取材など上げる。

さらに腕を磨きたい一心で昭和四十四年十月、日本農業新聞入社。編集局写真部編集委員として働く傍ら、三十三年間の労をねぎらいたいとの願いを込め、当日は、スピーチあり、郷土芸能ありで祝いたい、と感謝の弁。

毎日新聞東京通信員となり、「ふる里の祭りと祈り」を第一報に、今日まで約二千本の送稿。「新聞報道は郷友の温もりあり感動だ。一冊の本に出版してほしい」と望む声も多くなった。

大会運営委員長は「郷友会の発展、私たちを大きくしたのも有田さんの力です。還暦を区切りに、二十三年間の労をねぎらいたいとの願いを込め、当日は、スピーチあり、郷土芸能ありで祝いたい、と感謝の弁。



組閣前の大臣呼び込み取材する有田さん（官邸前で）

写真製版技術を導入

元は本社社員。1959年に18歳で入社直後からカメラに夢中になり報道写真に興味。そこで希望して大阪の会社に2年間出向。64年、本紙に初めて写真取材や製版技術を導入した功績は顕著だ。

その後報道カメラマンの技術をさらに磨きたく上京し30歳で日本農業新聞入社。全国に1700人の通信員を擁する同社で写真記者、調査役、編集委員として33年勤め63歳で退職した。

2000本以上の記事送稿

その間の37歳の時、2代目の東京通信員を委嘱されるが、その直後郷里の石垣市出身の具志堅用高さんが世界チャンピオンに。有田さんは以来そのカンムリワシが前人未到の連続13回防衛を果たし燃え尽きるまで、スポーツ紙記者以外では異例のリングサイドから発信を続ける。

郷友の動きつぶさに

有田さんは「郷友の動きを末端まで広げ故郷に紹介したい」を信念に、東京八重山郷友会が新年会、東京の宮良長包の夕べ大盛況、平真小と二中のマーチングが日本一、小浜島ばあちゃん合唱団が東京で堂々のデビュー、東京波照間郷友会が学童慰霊碑建立で募金、大嶺投手がプロデビュー戦―などの記事をつぶさに送稿。「本土で活躍の顔」も150人余紹介した。

有田さんがこれまでに送稿した記事は2000本以上に上り、郷友とふる里を結ぶパイプ役として各郷友会の発展に尽くした功績は大きい。こうした功績をたたえ、「有田静人さんの還暦を祝う感謝激励会」が都内のホテルで郷友を中心に各界から200余人参列で盛大に開催された。

また有田さんは30年余八重山ひるぎ会（具志堅用高会長）で八重山毎日新聞杯チャリティーゴルフも開催。募金や車いすなどを郡内の福祉施設などに寄贈。そして報道カメラマンとしては2004年に石垣市民会館で念願の「報道写真展」も開催した。

（元編集長・上地義男）

通信員から新聞記者に

八重山毎日新聞 通信員列伝《7》

関東地区

黒島安央さん

報道に興味で応募

2012年から有田静人さんを引き継いだのが石垣市新川出身の黒島安央さん（39）だ。17年まで5年務め帰郷後本社に入社。現在編集部で取材活動に奮闘している。

通信員は大学を卒業して都内で生活していた27歳の時、有田さんの後任の話を知ったのがきっかけ。当時は八重山商工の甲子園出場や難産の新空港着工、それに教科書問題や尖閣問題で故郷が全国的にクローズアップされることが多く、報道に興味があったので応募したという。

バイトや教育系の出版社で勤務しながら基本的には有田さんの取材活動を踏襲。東京八重山連合会長に大谷氏再選、関東宮良郷友会が花見会、市観光協会が埼玉で新空港開港アピール、東京みずほ会が創立20周年、与那国町商工会が横浜でフェアーなど比較的まめに送稿してきた。

古典民謡の発表会では東北まで出向き、自衛隊問題では住民の要請行動にも同行した。この通信員の経験が現在の本社業務に生かされている。

基地や身近な「戦の記憶」に関心を

音楽と映画で「沖縄」考える

映画上映後行われた真田弥生さん（写真右端）仲村颯悟監督（左から2人目）らによるトークショー＝8月26日、東京都内

【東京】沖縄の基地問題を考える音楽と映画上映のイベントがこのほど、都内で開催された。同時期に開催された

東京でイベント

「喜多見と狛江の小さな映画祭」との提携イベントとして行われた。東京波照間郷友会の真田弥生さん＝さいたま市出身＝が参加する音楽ユニット「MILK（弥勒）」主催のライブ演奏や仲村颯悟監督＝沖縄市出身＝の短編映画「ゆしぐとぅ」を上映。真田さんや仲村監督らによるトークショーも行われた。

都内在住の真田さんはスキューバダイビングで訪れた波照間島にひかれ、東京でも郷友会に参加。琉球・八重山古典民謡に研さんしながら演奏活動も展開。沖縄が抱える基地問題にも関心を持ち、本土でも実情を知ってほしいとライブで呼び掛けている。名護市辺野古の大浦湾に潜った経験もある。

真田さんがリードボーカルで三線を務める音楽ユニット「MILK（弥勒）」は新曲「地球（ウシ）どぅ宝」を初披露した。

仲村監督は2010年、当時中学生の時に沖縄を舞台にした「やぎの冒険」でデビュー。現在は本土で大学生として過ごし、戦争の認識について沖縄とのギャップを感じた。ことし、基地に揺れる沖縄の今を描いた映画「人魚に会える日」を公開。さらに東京の高校生らから、沖縄戦について考えるイベント内で上映する映像制作を依頼され、短編「ゆしぐとぅ」を制作。6月23日慰霊の日に合わせてインターネット上で公開した。

上映後のトークショーで仲村監督は、映画を通じて「沖縄戦は悲惨だった」というありきたりな“感想文”で終わるのではなく、日本各地に戦争があり、戦争から続いている現在がある。それぞれが自分のじいさんばあさんからその時のことを聞くことがいちばん大事なんじゃないか」と作品に込めた思いを語った。

真田さんは「沖縄のことをやっていると、日々暮らしている本土との温度差がもどかしいが（映画をきっかけに）もっと関心を持ってほしい。私も歴史を見つめていきたい」と話した。

映画「ゆしぐとぅ」はインターネット上で見ることができる。（http://www.uingyonaeruhi.com/yushi）

（黒島安央通信員）

RBCキャスター経験者も

小笠原大介さん

異色の経歴の4代目

東京は比較的順調に通信員が引き継がれ、帰郷した黒島さんの後、2018年に4代目を委嘱されたのが現在の小笠原大介さん（49）だ。異色の経歴の持ち主で今年6年目を迎える。

東京出身。亜細亜大時代にシアトルに留学し、英語が堪能なこともあって卒業後ロサンゼルスの日本総領事館で2002年まで3年勤務。その後琉球放送テレビで04年から11年までスポーツキャスターを務めた。

しかしアナウンスなどの勉強をしたくて早大大学院に入り、その後フリーランスとして各方面で勤務している中で、八重山毎日新聞通信員は沖縄タイムスの東京通信員をしている関係で兼務することになったという。

「いのだ幼稚園がソニー教育助成論文入選園に選ばれる」を皮切りに、八重高カラーガード部が全国大会で金賞、300人の郷友が東京八重山まつりで交流、平良海馬1軍に意欲―などを次々送稿し、精力的だ。

有田さん同様、毎年の新年号で「東京特集」も継続。

（元編集長・上地義男）

大阪は8人が通信員

八重山毎日新聞 通信員列伝《8》

関西地区

与那原善弘さん 黒島厚子さん 松山厚子さん

大半が詳細不明

関西地区の本紙の通信員は1983年にスタートし、与那原善弘さんを初代に黒島厚子さん、松山厚子さん、星野和代さん、登野城喜一さん、宮良郁代さん、小波本直吉さん、岡田紘二さんの8人が担ってきた。

しかし残念ながらその大半が詳細不明。というのも本紙は通信員に履歴書などの提出を求めてきたわけでもないので、今回近畿八重山郷友会関係者に尋ねたところ30～40年も前のことなので出身や職業、年齢など履歴は確認できなかった。

恐らく関西は郷友会活動が活発だったので郷友会関係者とみられる。

まず初代の与那原さんは83年から85年の間に近畿八重山郷友会が新年会、関西宮良郷友会が大阪城公園で恒例の花見会、同黒島郷友会が新年総会―などの記事を送稿。

黒島さんと松山さんは同じ厚子なので同一人物か不明だが、86年から90年まで送稿している。各郷友会の総会や新年会を中心に石垣市出身の飽浦敏さんの詩集出版祝う、大阪守口市議に三浦氏が3選、嶋根英夫さんが今度は館展賞受賞、近畿波照間郷友会が30周年で名称変更―などだ。

登野城喜一さん

弟も波照間で通信員

登野城さんも故人となっているだけに詳細は不明だが、波照間出身で松下電器（現パナソニック）に勤務。定年後は友人らと物販の会社を起業の一方、波照間や近畿八重山郷友会で会長や幹事長などの役員を長く務めた。その傍ら、ふる里八重山への郷友会の活動や郷友らの活躍の報告を兼ねて94年から2000年まで通信員をしていたようだ。

同じ時期、郷里の波照間で偶然弟の景作さんも本紙通信員を務めている。

今年は正月早々、北陸で能登地震の大惨事があったが、29年前の1995年1月には関西も、阪神淡路大震災で6000人超が死亡の未曽有の大惨事に見舞われている。

登野城さんは当時「阪神大震災で八重山出身者も3人死亡、47世帯の家屋が全半壊」と被災の状況を伝え、8月は「近畿八重山郷友会が総会で支援に感謝」を送稿してきた。そのほかには「近畿八重山郷友会、大阪―石垣直行便実現に沸く」「旅の鉄人池内嘉正さん祝う」なども送稿。

（元編集長・上地義男）

阪神大震災で郷友も被災

CHI SHINBUN ☎09808(2)2121 FAX09808(3)0675 日本交通・供給文部省認定 第2-0794

阪神大震災

八重山出身者3人が死亡

けが3人、家屋の全半壊は47世帯も

郷友会の調査で判明 義援金の配分を開始

【大阪】近畿八重山郷友会（阪神大震災救援対策委員会、小波本直吉委員長）は二日、大阪市淀川区中富田会所で委員会を開き、八重山出身者の被災状況について協議。会議後、ただちに義援金配分を開始した。同郷友会の調査によると、郷友会関係の被害数は十九日現在、死亡者三人、けが人三人、家屋の全壊二十八世帯、半壊十九世帯、一部損壊三十六世帯に上る。

これは実行委員の多郷友会員と関西トゥバーマ会員を中心とした被災状況集計で、八重山関係者の被災状況が明らかになったもの。同日の委員会では調査県の中間報告と被災者援護基金の第一次配分基準を決議した。

寄せられた義援金の第一次配分基準は死亡一万円、家屋全壊一万円、半壊五万円、一部損壊三万円、けが一万円と決定。第二次の配分は今後の入金状況で決議することにしている。

小浜、波照間、西表の郷友会員は、同郷会を通じ寄せられた義援金の一部を義援物資として、一月末から二月初旬にかけて、被災者に送った。

被災者援護活動が決議された。

穂各社から届けられた飲料水、毛布などの義援物資は、一月末から二月初旬にかけて、被災者に送った。

交通網問題や交通費捻出のため、各郷友会に呼びかけ、会員の協力を求めていくことになった。

義援金や支援物資の配分に向けては、郷友会名簿に載っていない独身者および郷友会に出席しない人たちの情報が不足しており、八重山からの協力要請が望まれている。

各郷友会を中心とした救援活動は、地震発生直後から個々に実施されてきたが、全体にまとまった調査集計は今回が初めて。実行委員会はこの内容を全世帯に配録し、全体状況の把握と義援作業を進めていく。

西宮市子育て中に住む関西トゥバーマ委員会員でもある仲里文さん（宮古出身）は、自身も被災者だから連日郷友の情報収集に走り回り、多くの郷友の被災状況調査に努めている。多郷友会員は、地震発生直後から個々に実施されてきた調査集計は今回が初めて。実行委員会はこの内容を全世帯に配録し、全体状況の把握と義援作業を進めている。

西宮市子育て中に住む関西トゥバーマ委員会員でもある仲里文さん（宮古出身）は、自身も被災者だから連日郷友の情報収集に走り回り、多くの郷友の被災状況調査に努めている。多郷友会員は、地震発生直後から個々に実施されてきた調査集計は今回が初めて。実行委員会はこの内容を全世帯に配録し、全体状況の把握と義援作業を進めている。

「成人男子の既製衣料品の見直しに関する調査集計」によると、現在の商品サイズの見直しに努力している。多郷友会員は、現在の商品サイズ表示でパーマ（ウェーブ）できる成人男子は全体の四分の一にとどまっており、半数以上の人は、ゆるやかなウエストのものを選んでいる。M、Lなどのサイズ表示は当てはめ同様は、現在の表示方法でなくなっている。S、M、Lなどのサイズ表示は、現在の表示方法でなくなっている。

S、M、Lなど衣料 サイズ見直しへ

（宮古毎日新聞・大阪通信員）

通産省は、胸が厚くなるなどの着用者の体形変化を考慮して、これまで使用のサイズ表示を変えてきたS、M、Lなど衣料サイズの見直しを進める。四月から具体的な作業を進める。一九九五年度中に機動的な調査を出す方針だ。

生活を脅かす震災、損壊した家屋を応援して生活している郷友らと被災した郷友らは悲しみに胸ちぢむ日々を送っているのが実状。

週末はボランティアも

八重山毎日新聞 通信員列伝《9》

関西地区

小波本直吉さん

強いふる里への思い

登野城喜一さんの後を1997年から引き継いだのが石垣市登野城出身で神戸市在住の小波本直吉さん（84）だ。その間にいた宮良郁代さんは、当時小浜島の教員をしながら島の通信員もしていたが、兵庫の大学院に通った95年の一時期、大阪通信員も兼務した。

小波本さんは神戸製鋼で勤務しながら、近畿八重山郷友会の活動にも会長、副会長の役員を務めるなど尽力した。そして58歳の時引き受けた通信員は2012年まで15年間務め、「八重山より神戸での生活がはるかに長いが、ふる里のことは忘れたことがない」というように、関西の八重山の人々の活動や活躍を精力的に発信してきた。

それは「嶺よう子さんがニーファイユー熱唱、大阪で鳩間芸能の夕べ開催、とうばらーま関西大会24人が熱唱、夏川りみの紅白出場でファンクラブが新年祝賀会」など多岐にわたる。

小波本さんはまた阪神淡路大震災への思いも深く、神戸の仮設住宅に被災者を訪問する「週末ボランティア」にも参加を続けてきたようだ。

岡田紘二さん

コロナ禍に郷友会長

小波本さんから2012年にバトンタッチされたのが岡田紘二さん（70）だ。石垣市大浜出身で旧姓は石垣。

八重高卒で東京の大学を中退後、姉のいる大阪で難しい技能の関西特殊土木工業株式会社を若干27、8歳で起業し40年余経営してきた。その傍ら郷友会活動にも尽力。幹事長、副会長を経て2020年に近畿八重山郷友会の会長に選任され、コロナ禍で難しいかじ取りを任された。

通信員は58歳のとき依頼され、今年で12年目を迎える。その間「波照間郷友会が新空港開港で里帰りツアー計画、大阪平真郷友会が敬老会、きいやま商店やミヤギマモルが大阪でライブ」などの記事を意欲的に送稿。

新年号では毎年、1ページを割いて「大阪通信員だより」を特集。写真で各郷友会の活動を報告の一方、コラムで1年を振り返り、「島に住んでいる郡民にとっては経済は発展してほしいでしょうが、自然破壊が進むと八重山観光はどうなるでしょう」といったふる里を憂う年頭所感も。

（元編集長・上地義男）

9　2018年（平成30年）1月1日（月曜日）　八重山毎

近畿八重山

大阪通信員だより

コラム

故郷、八重山の皆さま、新年あけましておめでとうございます。

郡民の皆様におかれましては、美なく希望に満ちた新しい年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

さて、師走は何かと忘年会や送別会やらと、外での飲酒の機会が増え、体調管理に気をつけているところです。

日頃から、役員会の帰りとか、行事のあととか、何かとこじつけては飲酒の場を作り、友人たちからあきられている。

「よく身体がもつなぁ」とか「飲み過ぎで身体壊すなよ」とか友人たちから言われるが、誉め言葉と勘違いして益々酒浸りの昨年でした。

若いころには、酒での失敗も2、3度あり、酒をやめようかと考えたこともあったが、「酒を飲んでも、酒に飲まれるな」を教訓に、老いても益々盛んになっている。

今年は、すぐには、無理かもしれないが「休肝日」を週に二日程作り、お酒が良薬となることを願い、体調管理に気をつけていきたい。

皆さまも、お酒の飲み過ぎには気をつけて、楽しい日々をお過ごし下さい。

今後も、体調を良好な状態で維持しつつ、関西での八重山出身者との交流、八重山の芸能公演、島の唄者のライブ等を通じて、取材を重ねて、故郷八重山との絆を深めていきたい。

八重山毎日新聞大阪通信員　岡田紘二

2017年活動スナップ

平成29年度近畿八重山郷友会の新年会で来賓を囲む会員の方々

花見会を楽しむ近畿八重山郷友会の皆さん（大阪城公園）

毎年「大阪通信員だより」

沖縄建設新聞の社長

八重山毎日新聞 通信員列伝《10》

那覇地区

大久勝さん

向上心強く意欲的

那覇地区は1976年に加盟の時事通信那覇支局に依存していたのか、80年代まで時折那覇発の記事が出るが、通信員が配置されていた形跡はない。90年以降4人が委嘱されているが、それも本紙の那覇支局開設の2002年以降、基本的に廃止されている。

那覇地区で最初に委嘱されたのが石垣市宮良出身の大久勝さん（57）だ。向上心の強い意欲的な若者は、八重農3年の時NHK青年の主張県大会に出場して優秀賞を受賞。沖大学生時代に郷里の先輩のつてで本紙通信員となった。

90年から93年まで3カ年務めたが、「県新庁舎が開庁、県知事選に大田昌秀氏が出馬表明、とうばらーま沖縄大会盛況、沖縄山形屋の八重山物産展売れ行き好調」などを精力的に送稿。新年号では「島を離れた若者たちとの新年座談会」「八重山ビジュルー考で新年座談会」を企画し、意欲的に取材活動した。

その後25歳の時、県内から130人が参加した「中国3千キロ6カ月踏破」メンバーに加わり、帰国後に就職した沖縄建設新聞で42歳で社長にまで上り詰め、2期務めた。現在帰郷し石垣島土地改良区で施設管理課長。

その2年後に故郷の糸満に転居し、62歳の95年から通信員、嘱託記者として7年間務めた。

その間「3市町が牧中予算化を県に要請、琉球朝日の先島放映は5年以内、新空港めぐり県議会空転、県民大会で米兵の少女暴行糾弾」など県政や県議会の八重山関連の動きをこまめに送稿。2002年2月の那覇支局開設まで実質的に支局の役割を果たしてきた。

本社那覇支局は今年開設23年目。現編集部長の比嘉盛友を初代にその後、上地矢寸志、高良新輝、多宇清盛、鬚川修、立松聖久、松井弥恵子、玉津盛昭の各記者がそれぞれ支局長を務め、沖縄本島地域の取材をほぼ一手に引き受けている。

徳松さんは2014年に82歳で死去。

（元編集長・上地義男）

地域問題研

「地先案」を県に要請

新石垣空港対策室長「宮良牧中案で推進」

牧新空港対策室長に要請を行う富川代表ら

【那覇】新石垣空港建設位置について登野城地先案での建設を提起している八重山地域問題研究会（富川敷男・新石垣空港建設対策室長に「地元住民から出された地先案で新空港を建設して頂きたい」と要請した。八十八代表）の代表が十八日午前、県庁を訪れ、渡嘉敷室長に「地先案」を県に要請した。

要請には富川代表ら四人が参加。富川代表が要請書を読み上げ、「安全性、利便性、快適性、総合調和性や合意形成の可能等にかんがみ、この提言を県としても早急に検討・取り組んでほしい」と述べ、同案での建設を要望した。

これに対して渡嘉敷室長は「皆さんの行動はこの問題を何とかしたいという気持ちの表れと思う。地先案は、報道で知っているだけだが、港湾、漁港や国立公園など整合性に関して色々と課題があるだろう、との印象を持っている」と述べ、「県としては宮良牧中案で建設を推進している段階であるご理解をいただが、子や孫のためにも地先案は将来的にメリットが大きい」と述べ、同案の優位性をアピール。

同席した伊良皆高吉県議は「第三者的立場で出席している」と前置きした上で「住民の自発的な発想から生れた提案が、こうして大きな住民運動として表れている。県は、住民の意見を最大限尊重してほしい」と申し入れた。

県内各政党も同案には高い関心を示しており、同研究会によると申し入れがあれば勉強会を開いて理解と協力を求める考えだ。

同研究会は十八日、県議会に対しても要請を行った。（那覇通信員）

実質的に那覇支局の役割

徳松安雄さん

定年後那覇通信員に

徳松安雄さんは本紙元編集長。83年の編集長就任後、舌がんを手術。その後遺症で言葉が不自由になり苦労していたが、93年無事定年を迎えた。

多彩な才能の女性

八重山毎日新聞 通信員列伝《11》

那覇地区

諸見里杉子さん

文学賞など受賞

大久勝さんを1994年に引き継いだのが那覇市出身の諸見里杉子さん（52）だ。立正大を卒業後、ラジオ沖縄の手伝いをしている23歳の時、通信員の話があり引き受けたという。

通信員はわずか1年だけだったが、その後彼女は持ち前の多彩な才能をフルに発揮。現在はナレーション、朗読、司会、吹き替え、アナウンス指導などの会社を立ち上げ事業活動の一方、執筆面でも琉球新報短編児童小説正賞、おきなわ文学賞小説佳作、昨年は新沖縄文学賞佳作を受賞するなど多方面で活躍中だ。

期間中「竹富町議会が県に宮原食品の操業継続要請、離島フェア八重山コーナーが人気、新空港建設で県に地先案要請、大島保克・新良幸人・BEGINが那覇でジョイントコンサート」などを意欲的に送稿。そして本紙元編集長に引き継いだ。

立ち見が出る大盛況

八重山民俗舞踊保存会

那覇の郷土劇場で初公演

「八重山の節と踊り」が、22日那覇の沖縄郷土劇場で開催された。八重山民俗舞踊保存会初の那覇公演で五百四十席ある会場は満席、立ち見がでるほど大盛況だった。公演は師範らによる「赤馬節」で壮麗に幕開け。「鳩間節」や「鷲ぬ島節」など八重山の歴史、生活や豊かな自然を表現したうたと踊りが次つぎ繰り広げられた。

中でも、「黒島口説」が始まると、会場では一緒に唄を口ずさむ人も。最後は、出演者全員による、稲作をテーマにした「ゆんたしょうら」で賑やかに幕を閉じた。

「素直で美しい八重山のうたと踊りを島外にも知ってもらい、若い人に継承してもらいたい」との本盛秀保存会会長の想いは会場に伝わったようだ。

観客には何年も前に八重山から那覇に引っ越してきたという人も多く、「懐かしくおもいます。今日はぬちぐすいでした」と十分に堪能した様子だった。（諸見里那覇通信員）

フィナーレは全員でユンタショウラ。那覇公演は大盛況だった

講座を開く「沖縄」発信者も

大石直樹さん

「山之口獏賞」の詩人

那覇支局開設後初めて、元本紙記者の大石直樹さん(63)が希望して2011年から特例的に通信員となった。

竹富町小浜出身。本紙記者退職後那覇で印刷会社などに勤めていたが、本人によれば当時50歳で起業した「自分史センター」の「営業活動」を兼ねて希望したという。

13年まで約2年務め、沖縄本島で活躍する郷友「頑張ってます」計11人掲載を中心に、元本紙波照間通信員・本明紅さんのおきなわ文学賞県知事賞表彰などを送稿。詩集「八重山讃歌」で第31回山之口獏賞を受賞。

九州地区

西表宏さん

香蘭女子短大教授

2012年の60歳の時から福岡在住の西表宏さん（72）が通信員。石垣市登野城出身。

香蘭女子短期大学で長く教授を務め、その間03年から17年まで沖縄に関する公開講座。さらに地元福岡のラジオや市民大学などで「沖縄」を発信している。5年前定年し現在名誉教授。波照間永吉県立芸大元教授や高嶺善伸元県議らが同期。

12年に九州ばがーすまを考える会（中村鉄夫会長）再発足、16年大工哲弘ライブ、19年横目博二・貞子研究所が八重山民謡で魅了ーを送稿してきたが、西表さんによれば福岡は材料が少なく「開店休業状態」。（元編集長・上地義男）

島おこし運動をけん引

八重山毎日新聞 通信員列伝《12》

西表西部地区

石垣金星さん 加勢本曙さん

運動アピールのため

鳩間島を含め10の集落で人口1500人余の西表西部地区の通信員は8人いるが、最初に通信員になったのが1980年に当時島でシマおこし運動のリーダーをしていた地元祖納出身の石垣金星さん（当時35歳）。

金星さんは島おこし運動アピールもあって通信員を引き受けたはずが、思いのほか運動が多忙で送られてきた記事はそれほど多くなかった。

金星さんの島おこし運動は那覇でのテレビニュースがきっかけ。東京の大学卒業後教員になり、沖縄の復帰闘争中のある日、ふる里の土地が本土企業に二束三文で買いあさられ、骨董（こっとう）ブームで墓荒らしも横行しているとのニュースに衝撃を受け、1972年の本土復帰と同時に帰島。

以来教員もやめて自然農法の農業を生業としながら西表を掘り起こす会や妻の昭子さんと島の染織り復興で「紅露工房」を開設。さらに全国に先駆けて西表島エコツーリズム協会も設立。島の若者たちとリゾート開発反対、自然環境保護、文化でシマおこし運動をけん引してきた。

その間金星さんは祖納公民館長や竹富町史編集委員なども歴任、節祭など島の伝統文化継承にも尽力した。2022年76歳で死去。

「デンサ節」など

西表西部7校が音楽発表

【西表】西表地区学校職員会主催の第六回音楽発表会が、このほど上原小学校体育館で開かれ住民多数が詰めかけにぎわった。同発表会は年に一度、西部地区七校の持ち回りで開催されているものだが、今回は東部から大原中学校も初参加し、盛り上がりを増した。

今年は鳩間小中学校が当番。鳩間小の「デンサ節」、「鳩間中森」の合唱で始まったが、チョコレートの缶を使った手造り三味線で演奏する場は、父母らの熱気でムンムン。学校（西表小）もあり、住民は大喜び。アンコールも飛び出すなど盛況だった。

三時間余りの発表を終え、恵美侯をついで参加した鳩間小の代表は「いつも小さな音楽室で練習しているが、今日は大きな体育館で発表できてうれしかった」と感想を話し、また船浦校の大仲康文教諭は「今回は大原中の参加で、待ちぼうけ。次回からは西部地区だけでなく、西表全校生徒で開催したい」と語っていた。（西表西部通信員）

日頃の音楽活動の成果を発表した西表西部地区音楽発表会

島の状況に危機感

金星さんに代わって実質的に通信員を担っていたのが同じ祖納出身で当時白浜中教員の加勢本曙さん（当時32歳）だ。東京で復帰運動経験者の加勢本さんも同じように島に危機感を持ち、金星さんと共にシマおこし運動をけん引した。

当時32歳の加勢本さんは、琉球新報の通信員をしていたこともあり、83年に石垣市新川小に転勤するまで3年間、実質的に本紙通信員も兼務した。

その間本紙に送稿された記事は「祖納―白浜間道路工事が雨で難渋、下田正夫医師人事で西表住民大会、沖教組西表分会が初の教研集会と教育祭、西表西部地区で町政懇談会」などがある。

加勢本さんは鳩間校で教頭に昇任し2010年白保小で定年退職。その間4年間は沖教組八重山支部の専従書記長も務め、「教え子を再び戦場に送らない」などと大衆運動にも尽力した。

（元編集長・上地義男）

通信員を実質肩代わり

8年間通信員不在

親子で陶芸楽しむ

ユニークな作品が続々

中野子供会

【西表】上原地区中野公民館子供会（津嘉山翔会長）は十五日、中野公民館で初の陶芸教室を開いた。同地区で「青峰窯」を主宰する高山宗久さん（中野子供会育成会副会長）を講師に招き、親子約二十五人が参加して楽しい雰囲気の中、焼物づくりに挑戦、ユニークな作品が次々とできあがった。

参加者は、高山さんから焼物づくりの基本を学んだあと、用意された粘土で作品作りに取り組んだ。

子供たちは初めは何を作ればいいのか決まらず、友達の様子をうかがっていたが、しばらくすると、手の動きが忙しくなり、怪獣やコップ、シーサーなどの形ができてきた。父母らも大きい皿やおわんなどの作品づくりに懸命。

二時間ほどで怪獣アラノザウルスやシーサー、皿、一輪差しの花びん、鉛筆立てなどさまざまな力作がテーブルに並べられた。

来月十四日のバレンタインデーのころに釜出しして完成する見込みで、参加した親子は「楽しみだね」と期待を膨らませていた。

（比嘉春吉西表西部通信員）

陶芸を楽しむ子どもたち

八重山毎日新聞 通信員列伝《13》

西表西部地区

前大用裕さん 比嘉春吉さん

東京から帰り通信員

仙台で6カ所もの進学塾

当時石垣金星さん、加勢本曙さんとも匿名の通信員だったが、加勢本さんは新川小に転勤後も1986年ごろまで白浜の実家に帰省の際、時折記事を出稿していた。

その後94年に通信員となったのが当時43歳の加勢本さんと同期で同じ祖納出身の前大用裕さん（73）だった。それまで西部地区は8年間も通信員が不在だったが、その後は移住者の皆さんたちによって順調に引き継がれる。

前大さんは東京で都立高校の非常勤講師などをしていたが、88年に37歳で帰郷し家業の旅館を手伝っていた時通信員を打診された。約2カ年通信員を務め、「第3回西表地区グラウンド大会、船浦中が老人施設の南風見苑で清掃奉仕、白浜小中の児童生徒が慰霊の日で平和祈願の記念植樹」などを本紙に送稿した。

沖縄の本土復帰運動世代は革新的なリベラル思想が多いが、前大さんも今なお本紙に「先島に自衛隊配備はいらない―衆愚政治は戦争を招く近道」「中国にミサイル向けるんですか？」「辺野古と自衛隊の根底に何があるか」など数多くの論壇を寄せている。

仙台から移住

前大さんの後を受けたのが宮城県の仙台から移住していた当時50歳の比嘉春吉さん（78）。元々西表浦内出身だが、沖縄工業高校卒業後米留でハワイの大学に進み、そこで知り合い結婚した妻の優子さんの出身地仙台で、ともに英語が堪能なことから夫婦で6カ所もの進学塾を開いていた。

しかし春吉さんの強い希望で92年、娘が沖国大入学を機に夫婦で西表に移住。そこで英語塾をしていた95年に通信員を引き受けた。

以来塾の傍ら2000年に優子さんの両親介護のため仙台に戻るまで約5年間務め、「地元の上原小の七夕集会に仙台名物の七夕飾りを贈る、白浜小中が地域挙げて運動会、命がけのイノシシ猟、中学総体バスケで船浦中女子が15年ぶり優勝、西表でヨナグニサンが華麗に舞う」などを精力的に送稿した。

比嘉さんは、「30数年ぶりに島に戻ったが、少しは島のために役立てたかな」と感想。

（元編集長・上地義男）

島に魅せられ永住決断

八重山毎日新聞 通信員列伝《14》

西表西部地区

佐賀英美さん 長澤孝道さん 小山早苗さん

詳細不明の通信員も

本土復帰以降、県内各地に「沖縄病」に感染した本土からの移住者が相次いだが、八重山も西表島をはじめ各島々で移住が相次ぎ、その皆さんが本紙の通信員も担った。

西表西部地区も比嘉春吉さんの後、その皆さん4人が順調に通信員を引き継いだ。まず2000年から佐賀英美さんが通信員を務めたが、名前からして本土出身者と思われる以外は年齢、職業などの詳細は地元に知る人がおらず一切不明。2カ年務め記事は精力的に送られてきていた。

佐賀さんの後が大分出身で千立在住の長澤孝道さん(44)。

高卒後ニュージーランドに1年滞在後東京の専門学校でフィールドワークを学び、22歳で西表島に来た。島でシーカヤックツアーガイドとして働き、いずれは島を出る予定だったという。

しかし島での昔ながらの暮らしの中で25歳の02年から通信員の一方で集落の祭りに参加。魚介類の漁やイノシシ猟、山菜採り、稲作などを教わり、そこで島の自然、伝統文化、人にはまり永住を決断したという。

3年間の通信員では「白浜小中PTAが釣り大会、上原小児童がノコギリガサミ放流、上原地区住民が堀切警部補の送別会」などを送稿した。

西表に来て25年になるが、06年には西表の山・森・川・滝のすべてをフィールドとする初のトレッキング専門ガイドサービス「島廻遊」を設立。現在は干立で民泊を営み、16年から冬場は毎年台湾に西表のイノシシ猟のルーツを探る旅に出かけているという。

母子保健推進員も担当

小山早苗さん（56）は40歳の07年から通信員を務めた。兵庫県出身で現在は本土に転居しているため詳細は不明な部分が多いが、5年間通信員していたことで早く地域に溶けこみ、3児の母として当時は西表西部地区の母子保健推進員も担当していたという。

かつて「できるだけ多くの場所に顔を出し、分かりやすい言葉で記事も書くようにしている」と話していた小山さんは、6年間務め「西表青年会が85周年発表会、東日本大震災支援イベント開催、西表小中校が卒業証書づくりで恒例の紙漉き」などを送稿した。（元編集長・上地義男）

移住者で通信員空白なし

サバニで『川下り』

干立子ども会が浦内川で歓声

浦内川を元気いっぱいサバニで下る子どもたち

西表島西部の各地区でゴールデンウイークの期間中、五月五日のこどもの日にちなんでさまざまなイベントが催された。このうち干立子ども会はサバニによる川下りを行った。

なぐまじゐ育つようにという願いをこめて毎年行っているこの行事には、干立子ども会の帰省していた干立出身者の子どもたちが参加。浦内川上流の軍艦石から浦内橋近くまでの約八キロをサバニを漕いで下った。

お年寄りなど多数の地域住民も応援に駆けつけ、伴走船から盛大な声援を送って激励。子どもたちもこれにこたえて、一度も交代することなく完漕した。

このあと、公民館にて学事奨励会を行ない、バーベキューや配られたお菓子に子どもたちも楽しそうに過ごしていた。

（長澤孝道西表西部通信員）

移住して13年通信員

地域ならではの記事

八重山毎日新聞 通信員列伝《15》

西表西部地区

曽根田容子さん

結婚・出産で一時休業

現在西表西部地区通信員を務める曽根田容子さん（55）は、途中結婚・出産で約6年間空白があるものの今年で通算13年目を迎える。名古屋出身で祖納在住。

最初の2年間は旧姓の相川容子さんで務めた。横浜国立大教育学部卒後東京の大手印刷会社で勤務していたが、西表島に来た37歳の2005年から長澤さんを引き継ぎ通信員になった。東京の会社で広報部門を担当し、書くことは好きだったので引き受けたという。

島ではイリオモテヤマネコの動画をチェックする研究機関や西表島エコツーリズム協会で働く傍ら通信員をしていたという。そして、そこで東京出身で肉用牛農家の曽根田真さんと知り合い結婚。曽根田姓となった。

地域では地域ならではのニュースがあるが、西部地区では相川さんが送稿した数多い記事の中で「西泊の浜でウミショウブが一斉に開花」がそうだろう。

珍しいウミショウブ

それはウミショウブが国内では西表島のこの地域と石垣島の野底地域の浜でしか見られない珍しい「海草」だからだ。夏の大潮の昼間、小さな花を咲かせるが、それが年6日程度で晴れた日にしか見ることが困難というからきわめて貴重だ。

しかも近年はアオウミガメの食害で絶滅危機に直面、そのため現在野底小学校が企業などの支援も受けて水槽で株の再生を試みているという。

その後曽根田さんは出産のため一時通信員をやめていたが、後任の小山さんが本土に転居したため12年10月から約6年ぶりに再登板した。

以来現在まで「姉妹町の斜里町住民が西表訪問、祖納・干立で世願い、地域住民が盛大に前大用安さんのマインダナー祝い、船浮小中が裏山で恒例のタケノコ採り」などを次々送稿しているが、その中で祖納地区では、「父の日」「母の日」に互いが感謝パーティーを開いている記事も地域ならではのものだろう。

一男一女の子どもも高校生、中学生に成長。今までは子育て中心で通信員を続けてきたが、現在、心理カウンセリングの勉強とこんまり流片づけコンサルタントに挑戦している。（元編集長・上地義男）

次々と海面に姿を現すウミショウブの花（撮影・相川容子西表西部通信員）

ウミショウブの花咲く

海面覆う不思議な光景

西表島祖納

【西表】国内では西表島と石垣島にのみ分布しているウミショウブの花が二十三日午後四時すぎ、西表島西部祖納の北泊（にしどまり）の浜で一斉に開花し、花が海面を埋め尽くす不思議な光景がみられた。

ウミショウブ（トチカガミ科）は真夏の大潮の引いた時だけ咲く幻の花。潮の干満の最も大きい新月の大潮の日に集中して花を咲かせ、雄花が雌花に流れ着いて受粉する。ピークは六月と七月の大潮の日。

この日は同浜で午後四時すぎ、白い小さな花が少しずつ海面に現れはじめると、三十分ほどかけて海面を埋め尽くした。

流れに乗って雌花にたどり着けなかった雄花は次々と波に流され、約一時間ほどで不思議な受粉光景が姿を消した。

島の公共交通、観光担う

八重山毎日新聞 通信員列伝《16》

西表東部地区

玉盛雅治さん 寒原義輝さん

西表東部青年団会長

七つの集落で人口900人余の西表東部地区で通信員を務めたのは計5人。うち3人は本土から移住してきた方々だ。

本紙が最初に依頼したのが地元大原の玉盛雅治さん(68)。家業の玉盛スーパーを見ながら西表東部青年団協議会の会長を務めるなど、地域のリーダーとしてかなり活動的だった当時25歳の玉盛さんに依頼し、1980年から匿名で3、4年引き受けてもらった。

送稿は多くなかったが、当時の新聞を見ると「大富公民館が入植記念で運動会、西表東部で農業青年クラブ結成、西表豊原が盛大に入植30周年、竹婦連が大原で婦人大会」などの記事が見える。

玉盛さんはその後父や兄の跡を継いで西表島交通社長に就任。日本最南端の路線バスとして島の公共交通を担う一方、16台の大型観光バスやレンタカー、仲間川マングローブクルーズなどで島の観光産業を支えている。

さらに玉盛さんは、西表島が世界自然遺産に登録され環境対策が大きな課題になっているため、路線バスに脱炭素の電気自動車を導入し、さらにレンタカーもドライブレコーダーを利用してイリオモテヤマネコの交通事故死を防ぐロードキル対策にも注力している。

48年前に移住

玉盛さんの後を受けたのが本土から移住の寒原義輝さん(73)。兵庫県赤穂市出身。沖縄が本土復帰して間もない48年前の1976年、25歳で大富に来て定住。現在「ペンションなかまがわ」を経営している。

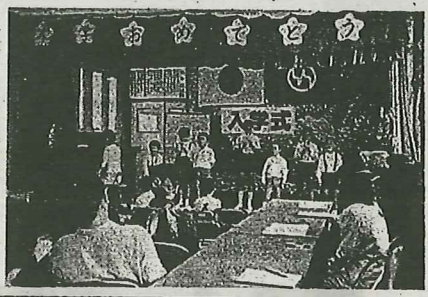
ちょうどペンションを始めた37歳のころ、地元の酒座で学校の教師に通信員を打診され引き受けた。玉盛さんの後3、4年間通信員不在が続き、学校の先生方が時折匿名で通信員代わりをしていた時期という。

約6年間務め、「婦人と健康でマングローブ学級、西表東部地区でも8人が成人祝い、大原小児童が持久走、大原中の西大舛くんが書道8段に合格、おおはら幼稚園に14人が入園、豊原地区が入植40周年」などの記事を送稿している。

寒原さんは「通信員をしたおかげで地域のいろんな場所に出かけ、楽しかった」と振り返る。(元編集長・上地義男)

古見小は2人が入学

地域あげて新一年生祝福



2人の新一年生を温く迎えた古見小の入学式

竹富町立古見小学校（松田正紀校長）でも九日、田本はる菜ちゃん、高田裕一郎くんのふたりが入学した。

古見地区は過疎化が激しく、学校存続の危機も何度かあったが、その都度、郷友会や親戚などの協力で危機を乗り越えてきている。そんな中で今回の二人は、七年ぶりに古見で生まれ、古見で育った子どもとあって地域の喜びは従来に増して大きく、入学式のこの日は地域を挙げて祝福していた。

古見小学校は二人の入学で児童在籍は九人となった。

この日の入学式では、東部地区の保育園、幼稚園の大勢の友達と離れ離れになって、最初は戸惑いを見せていたはる菜ちゃん、裕一郎くんもお兄さん、お姉さんの温かい歓迎にすっかり安心した表情を見せていた。

（寒原義輝通信員）

来社（9日）　宮良川土地改良事務所次長・平良昌史氏

援金として予備費から50～100万円を寄付しており、一した。

「る長社一陸自石垣駐屯地ゲート前

断続的に通信員不在

八重山毎日新聞 通信員列伝《17》

西表東部地区

宮良郁代さん 衣斐なおみさん 山城まゆみさん

大原校でも通信員

西表東部地区は玉盛雅治さんの後から断続的に通信員不在が続き、寒原義輝さん（73歳）、宮良郁代さん（60歳）、山城まゆみさん（63歳）ともそれぞれ3～5年の間隔があった。その期間は時折学校の先生方が匿名で通信員代わりをしていた形跡が見える。

寒原さんの後の宮良（現姓上原）さんは小浜校教師の時も通信員をしていたが、33歳で大原校に転勤してきて1997年から通信員をした。2年間務め「大原小がユニークな植物カルタづくり、イリオモテヤマネコの交通事故防止で説明会、大原小と幼稚園が学芸会で戦争マラリアの悲劇熱演」などを送稿した。

宮良さんから引き継いだ神奈川出身の衣斐なおみさんは、83年ごろ大富に移住。現在は島外に転居しているため詳細は不明だが、1年間通信員を務めていた。

地元の農家男性と結婚

衣斐さんの後2005年から通信員になったのが山梨生まれ東京育ちの山城まゆみさん。今年19年目となる。

1995年に35歳で西表に来て、そこで知り合った地元大富の農家男性と結婚し定住した。通信員は44歳の時に勧められ引き受けたという。

西表に移住して30年。3児の母として子育てをしながらパイン、キビ、カボチャ、コメなどを作る夫を手伝い、さらにイラストレーターとして美術教師をしたり、ハーブガーデンも営み、フェイスブックも開くなど多忙な中で通信員の仕事も精力的にこなしている。

その本紙記者も顔負けの通信員歴19年のベテランは、こうした行動力もあって地域の信頼も大きく、本土から移住の女性として初の大富公民館長や八重山地区社会教育委員連絡協議会長を歴任。西表文化交流推進会長なども務めている。

これまで通信員としては「西表東部地区で成人祝い、大富保育所園児ら雪だるまのプレゼントに大喜び、大原中生徒会24人が伝統の西表島横断、大富公民館が100歳とカジマヤーの大谷さん夫妻祝う、古見小児童らが海岸の漂着ごみ回収」などの記事をコンスタントに送稿している。

（元編集長・上地義男）

西表 6人の新成人を祝福

東部地区公民館連合会が式典

【西表】離島振興総合センターで、このほど西表東部地区公民館連合会（新博文会長）主催の成人式が開かれた。今年の新成人は小橋川咲、黒島智美、押野晃一、親盛千里、西原枝里維、次呂久ひかの祝福を受けた。

このうち親盛、西原、次呂久さんらは転居しているが、故郷での式に駆け付け、親子ともども地域住民と旧

西表東部地区公民館連合会主催の成人式が開かれ新成人が住民の祝福を受けた

拝野君は高校卒業と同時にUターンで美原の祖母の元へ。人工授精師の資格も取り、畜産業に従事している。古見っ子たちの指導も

車を、晴れ舞台で披露した。

祝賀会は成人者両親の「かぎやで風」で幕開け。豊原、大富婦人会の踊り、東部地区青年会の寸劇、島じょ～りエイサー隊の演舞で盛り上げた。

恩師の磯部大輔教諭は「東部地区のすごいところは地域で子供たちを育てているところ。この足元を忘れず広い世界で視野を広げて」と祝福。

川満栄長町長は「何があってもくじけることなくプラス思考で」と新成人を激励した。

（山城まゆみ東部地区通信員）

3カ所で通信員を経験

八重山毎日新聞 通信員列伝《18》

小浜

宮良郁代さん 保里京子さん

マスコミ志望

NHKの朝ドラ「ちゅらさん」で全国的に有名になった人口約750人の小浜島で通信員はすべて地元関係者4人。

1980年代は匿名が主流だったため氏名なしが多いが、92年以降はいずれも親が小浜出身で小浜校教師の宮良（現姓上原）郁代さん（60）と保里京子さん（69）だったことが分かった。

宮良さんは92年から5年間小浜。その後半2年間は兵庫の大学院時代に大阪を兼務。97、98年は大原校で西表東部の計3カ所で通信員をした。

それは元々宮良さんがマスコミ志望だったことが理由のようだ。その後宮良さんは八重山地区医師会長、石垣島の平和と自然を守る連絡会共同代表の上原秀政さんと結婚し上原姓となった。

宮良さんの後が保里京子さん。父は根本宏佑元校長。97年、98年の2カ年務めた。島では4人の子育てをしながら教員もして通信員もして「少しは島に役立ったかな」と振り返る保里さんは今年、登野城婦人会改め女性会の会長になった。

小浜島リレーで一周

小浜小中 親子 声援受け力走

【小浜】小浜小中学校（花城正美校長）の「第17回小浜島一周駅伝大会」がこのほど、同校を発着点に行われ、児童生徒と父母らがタスキリレーで島内を一周した。

大会は、教育目標の「健康でたくましい子」「ねばり強くやりとげる児童生徒」の育成を目的に開催。全児童生徒49人と、PTA・学校職員合同、石垣市から八重山電気工業、八重山観光フェリーなどのチーム多数が出場し、地域住民の声援を受けながら小浜島駅伝を楽しんだ。

参加者からは「生の区間だから、気持ちで挑んだ。死でした」「久しぶり走った。気持ちよかった」などの感想が聞かれた。

結果は次の通り。

▽小中学生子ども▽走れ！華麗なる奈々一族②小浜島車輪③つっぱしりのスターたち④走道スピリッツ⑤チーム①小浜糖業イターズ②南西ゾート③はいむる④八重山電気工業⑤八重山観光フェリー⑥TA職員合同⑦一園

（小浜通）

沿道の応援を受けてタスキリレーした小浜島一周駅伝大会

二人三脚、最長25年の夫婦も

大久研一さん まり子さん

竹富町の議会議長に

保里さんの後が地元在住の大久研一さん（59）・まり子さん（57）夫妻。99年から続け今年25年目を迎える。離島の現役で最長だ。

研一さんが小浜糖業時代の34歳の時引き受け、二人三脚で地道にコツコツと続けてきた。その後研一さんは2014年の町議選に初当選。3期目の22年には第27代議長に就任し、通信員は町議当選後ほとんどまり子さんの仕事となった。

そのためまり子さんは5児の母として子育ての一方、地域行事参加、通信員と多忙な毎日だ。

20年余で送稿した記事は「細崎海岸に約150キのマグロ漂着、小浜小中が島一周駅伝、小浜大豆で豆腐作り、30年ぶり島出身者同士が結婚披露宴」など数知れずだ。

かつてまり子さんは「本土で小浜の記事を見た人から連絡が来ることがあり、うれしいプレッシャーを感じる」「行事だけでなく島のことを一つでも多く取り上げたい」と語っていたが、ぜひそうして小浜島を盛り上げてほしい。

（元編集長・上地義男）

島の頑張り伝えたい

八重山毎日新聞 通信員列伝《19》

黒島

次呂久和一さん 当山哲男さん 前花邦和さん

牛の島の通信員

人口約220人に対し牛の数は3000頭を超える文字通り「牛の島」黒島で通信員をしたのは5人。しかしそのほとんどが時折は名前を出すが匿名希望だった。

最初に通信員をしたのは黒島校の事務職員の次呂久和一さん（79）。石垣市在住。1974年から勤務していたが、34歳の78年に本紙から依頼があり、「母の出身地でもあり、こういう小さな島で島の人たちが島の発展に頑張っていることを伝えたくて引き受けた」。以来鳩間校に転勤する86年まで7年間務めた。

この間「黒島中が初の西表旅行、琉大芸能研究会が黒島で合宿、黒島小が4人だけの修学旅行、黒島校に3年ぶり3人が新入学、東筋の旧正月祝いに山中代議士も出席」などを送稿した。

山中貞則衆院議員は黒島の海底送水実現に尽力し、「沖縄振興」に尽くした初代沖縄開発長官で竹富町の名誉町民。

次呂久さんはその後古見小に異動し、2006年に32年間の学校事務職員を終え定年退職した。

車増え牛も輪禍に

次呂久さんの後に1986年から通信員をしたのが元竹富町企画課長の当山哲男さん。町役場を定年後に故郷の黒島に戻り、通信員を務めた。

企画課長をするだけあって在職時代から発想力、企画力があり、筆者も命名で絡んだ竹富町の4年に1度の「ぱいぬ島まつり」創設に携わった。

当山さんの通信員の年数は匿名が多いため不明だが7、8年ほどとみられる。この間「黒島小中校が勤労生産学習でイモまつり、黒島のシンボルに牛の像建立、黒島小中が地震・火事の避難訓練、黒島高齢者学級が西表の文化財めぐり、黒島公民館が台風災害の早期復旧を町や県八重山支庁に要請」などを送稿した。

その中で牛の島ならではなのが「黒島も車が増えて牛も輪禍に」の記事。確かに黒島は牛が道路を闊歩（かっぽ）している。

当山さんと重なる形で黒島校教諭の前花邦和さんが92年ごろ通信員を務めていた。沖縄本島出身で現在転出しているため詳細は不明だが1、2年頑張っていたとは島の人の話だ。

（元編集長・上地義男）

住民総出でにぎわった黒島の旧正月

山中代議士も出席

黒島・東筋支会

盛大に〝旧正月〟を祝う

【黒島】豊年を祈願する黒島の旧正祝いが、二十日午後三時から東筋支会（新城栄男会長）の主催で盛大に催された。祭りには友利町長や山中貞則代議士（名誉町民）も列席、住民総出でツナヌミン、大綱引き等の神事が繰り広げられた。

黒島の旧正月は、今から四十年前まで盛大に祝われていた。当日は、大綱引き、大綱引き等の神事が繰り広げられて行われ、部落を南の参拝の同地の名称が名称のこのあと、祭で祈願これに先は、島島の水を迎え、念すべきとあいさった山中に当地に戻いてなって祝い。私がるよう祈った。この祝

竹富町の元企画課長も

保母さんしながら記事

八重山毎日新聞 通信員列伝《20》

黒島

服部貴美子さん

黒島に移住37年

当山さんを引き継いだのが神奈川出身の服部貴美子さん（70）。黒島が好きでたびたび旅行で訪れていたが、1987年に移住を決意し定住した。34歳だった。

移住後島でダイビング業をしていた山口出身の夫と知り合って結婚。通信員は93年に黒島保育所で保母（現保育士）さんをしていた40歳の時当山さんから打診され、「島のために役立てるなら」と引き受けたという。以来2004年まで11年間務めた。

この間「黒島校で一人ぼっちの卒業式、火事の船道さんに災害見舞い相次ぐ、黒島牛祭りの図画コンクール、女優の岸田今日子さんが黒島校児童らと交流、黒島で10年ぶりの結婚式、黒島で3年ぶりに成人祝い」などさまざまな記事をコンスタントに送稿している。

黒島保育所は24年間務め2013年に定年退職した。移住して今年で37年。島は普段から行事などで多忙な中、保育士の仕事の傍ら通信員、婦人会長、介護福祉デイサービスの仕事もこなすなど地域の信頼は厚い。

若月元樹さん

ウミガメのとりこに

服部さんの後2005年から通信員となったのが、NPO日本ウミガメ協議会黒島研究所の若月元樹さん（49）。

広島出身で高校卒業後母の故郷沖縄で大学在学中、ウミガメ産卵調査がきっかけでウミガメのとりことなり博士号も取得、協議会に入った。

そして高知の室戸研究所を経て03年の29歳の時黒島に来た。そこで05年からウミガメ研究の傍ら通信員を続け、今年19年目となる。

若月さんはかつてマグロ漁や捕鯨で栄えた漁師町の室戸で、過疎により廃校の校舎を活用して18年開業の「むろと廃校水族館」館長に就任。黒島研究所長も掛け持ちしているため、現在は実質3人の研究所スタッフで通信員をしている。

送稿記事は通常の地域や学校行事のほか「黒島のサンゴ白化も深刻、西表の海岸でノシシがウミガメの産卵巣覆う、黒島小中校がオカガニの放卵観察会」など研究に関するものも少なくない。

水族館は地域振興に大いに貢献しているようだが、平久保小や古見小跡も何とか活用したい。（元編集長・上地義男）

廃校跡の水族館長も

災害見舞い相次ぐ

火事被害の船道さん 郷友会からも救援金

黒島

【黒島】先月七日夜の火事で不運にも家を失った黒島の船道辰三さんに対し、島内外から次々と災害見舞の品や現金が寄せられ、船道さんを励ましている。

二十四日には、石垣在黒島郷友会（玉吉秀英会長）役員ら三人が黒島を訪れ、郷友会員らから寄せられた災害見舞金を船道さんに手渡し見舞った。

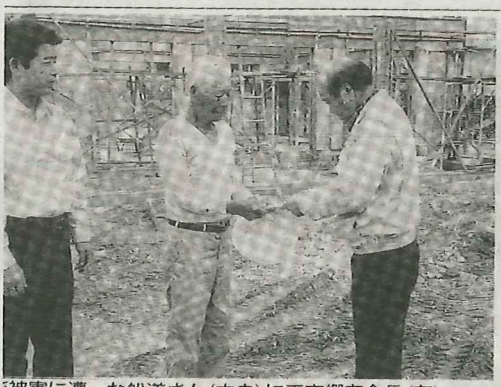
助けが出来ればと郷友会で話し合い募金活動をした。郷友会みんなの気持ちです。がんばってください」と船道さんを励ました。

船道さんは、すでに親戚や知人らの手助けにより新しい家の建築が始まっており、壁や柱は出来上がっている。

船道さんは「皆さんに迷惑をかけたが、親戚や皆さんのおかげでひしと伝わってきます」と目をうるませていた。

島内でも黒島公民館（島仲正弘館長）の呼びかけで募金活動がすすめられており、老人クラブからも、船道さん宅の仕事を手伝わせてほしいと依頼もきている。

又去る十六日には、竹富町役場、日本赤十字竹富町分区、竹富町社会福祉協議会からの見舞金が寄せられているという。（黒島通信員）



災害に遭った船道さん（中央）に玉吉郷友会長（右）

「町並み保存」に尽力

八重山毎日新聞 通信員列伝《21》

竹富

上勢頭芳徳さん

長崎から移住43年

石垣から船で10分。人口約350人の小さな島ながら国内有数の観光地の竹富島で、最初に通信員になったのが長崎出身の上勢頭芳徳さんだ。

旧姓は村下。福岡大を卒業し大阪の学校アルバム製作会社を経て本土復帰直後の1974年、30歳の時竹富島に魅せられ移住した。そこで島の民俗資料館の「喜宝院蒐集館」でガイドをしていた77年、本紙の通信員を引き受け、さらに喜宝院の同子さんと結婚して上勢頭に改姓した。

しかし竹富島に移住して43年、通信員になって39年の2016年、脳腫瘍が見つかり翌年死去。73歳だった。

上勢頭さんはこの間通信員として「島の文化を伝えていくことが島の町並みを守り、質の高い観光地づくりにつながる」をモットーに、「竹富小中PTAが初のテードウンムニ大会、竹富で3年ぶりに華燭の典、竹富中女子が中体連バドミントンで優勝、竹富こぼし育成会が由布島までサバニで航海、竹富で90回目の敬老会、竹富公民館が総会でリゾート開発反対を決議」など数々の記事を精力的に送稿した。

文化で島おこし運動

また島の一員としては子どもたちと学校の卒業アルバム作りを手始めに、喜宝院館長もしながら竹富公民館主事、竹富島集落景観保存調整委事務局長、NPOたきどぅん理事、全国町並み保存連盟理事などを歴任。さらに移住者としては初の公民館長も2期務め、島の発展に尽くした。

上勢頭さんが島を訪れた当時は、郡内各島々で本土企業が土地を買いあさり、乱開発が危惧されていた時代。竹富島も、「竹富島を守る会」を結成して土地を「売らない」「汚さない」「壊さない」「生かす」が理念の竹富島憲章を制定して「文化で島おこし運動」を展開。それが実を結んで1987年、国の「重要伝統的建造物群保存地区（町並み保存地区）」に選定された。

上勢頭さんはこれらの運動を「縁の下の力持ち」で支え奔走した。

本紙通信員はみんなが本紙を支え、地域を盛り上げているが、上勢頭さんは離島で最長の約40年務め上げ、竹富島に残した功績は顕著だ。

（元編集長・上地義男）

サトウキビ収穫を体験

「こぼし子供会」が共同作業

竹富

【竹富】竹富小中学校PTA（内盛佳美会長）と「こぼし子供会」（前本一多郎会長）はこのほど、本学年最後の文庫清掃とサトウキビ体験収穫作業が行われた。

本年度はPTA組織の中に文庫部会も設けられ、図書の随時貸し出しのほか、偶数月の清掃活動やお話し会、モチ焼き会など活発な活動を行っている。

こぼし文庫の庭には、一昨年に植え付けたサトウキビが大きく成長した。しかし竹富島では黒糖づくりが途絶えて久しいため、食べ方を知らない子供達が多く、このため農業委員でもある内盛会長が昔の子供達の説明や刈り取り指導を行った。

収穫したキビの一部は、図書「沖縄からの出発」を寄贈した岡部伊都子さんにも送られた。（竹富通信員）

サトウキビ収穫を楽しむ竹富・こぼし子供会の児童ら

離島で最長の40年通信員

観光施設巡り対立も

八重山毎日新聞 通信員列伝《22》

竹富

三浦彰徳さん 上間学さん

国指定が七つも

上勢頭芳徳さんが病気で倒れた2016年から通信員を引き受けたのが三浦彰徳さん。そして三浦さんの那覇転出で急きょ後を引き継いだのが上間学さん（62）だ。

上勢頭さんは、竹富島は人口約350人の小さな島ながら、国の指定を七つも持っていると良く誇りにしていた。

それは①島全体が国立公園②集落全体が町並み保存地区③種子取祭が重要無形文化財④ミンサー・上布が伝統的工芸品⑤夕日の名所・西桟橋が登録有形文化財⑥集落を展望できるなごみの塔が登録有形文化財⑦蒐集館の収蔵展示品が登録有形民俗文化財―の七つ。

島の人々が代々懸命に守り育んできたこれらが今や年間50万人もの観光客を呼び込む大きな観光資源になっている。

竹富島から観光の仕事がなくなったら島はどうなるのか。そこで「竹富島憲章」を制定して上勢頭さんら島の人たちの運動が展開されてきたが、それが近年、リゾートホテルや温泉施設を巡りたびたび摩擦が出ているのが今の竹富島だ。

通信員7年目

そういう状況下、どういう思いで三浦さんは通信員を引き受けたのか。北海道から移住12年目だった。現在那覇に転出していて詳細は不明だが、この間PTA会長や公民館役員も務めた。

2016年から2カ年の通信員では「竹富島憲章制定30周年記念講演、星のや竹富島が島民を特別ランチでおもてなし、竹富青年会が先輩から島の文化を学ぶ島習い教室開催」などを送稿した。

17年から三浦さんを引き継いだ上間さんは、那覇市出身で30年前の1994年に横浜から移住した。現在下請けで郵便事業や観光ツアーガイド、オンラインで日本語教師などをしているという。

通信員は今年7年目を迎え、「竹富小中児童らが地域の老人らとふれあい交流会、竹富診療所医師が医療講話、竹富で盛大に豊年祭、コロナで戦時中以来、種子取祭の奉納芸能と儀式が中止に」などの記事をコンスタントに送稿している。

ポジティブな性格で「記事は小さな島なので偏らず公平をモットーにしている」という。（元編集長・上地義男）

夏野菜カレー「おいしいね」

竹富小中で親子会食

【竹富】竹富小中学校（島仲信秀校長、児童生徒39人）は15日、恒例の「親子フルーツポンチと暑い日に卵サラダ、牛乳、白玉入り」を開催した。

この日は夏野菜カレー、フルーツポンチと暑い日に卵サラダ、牛乳、白玉入り

当銘ゆりえ栄養教諭は「夏野菜のゴーヤ、ヘチマ、オクラなどの食材をカレーに入れてみた。普段は苦手な野菜も保護者と一緒なら楽しく食べてくれると考えた。結果は上々です」と空になったカレーの鍋に満足げ。

保護者の一人、野原亜季さんは「普段とは違う子どもたちの食事の様子を見ることができた。おいしい給食で幸せな子どもたちです」と語った。

中今るいさん（小2）は「給食ではスープや汁物が好きと隣に座るお母さんにうれしそうに話していた。

親子会食は2006年から始まり、今年で10年目。次回の会食は3学期中ごろを予定をしている。食事

男性3人ふる里を発信

八重山毎日新聞 通信員列伝《23》

波照間

加屋本正一さん 登野城景作さん 金嶺一彦さん

人口減著しい波照間

南十字星がくっきりと見える日本最南端の島波照間で通信員をしたのは8人。3人は地元出身男性だが、5人は女性で4人は本土からの移住者。

離島はすべてそうだが波照間は人口が3分の1の460人にまで激減。政治家は一体何をしているのかと思う。加えて近年は防衛力の懸念が波照間にまで迫っている。県内の政治家は党派を超えて防衛力でなく、その巨費を離島と貧困に注ぎ込むよう求めるべきだ。

その波照間では1980年から通信員がいる。第1号は島の農業青年加屋本正一さん（72）。78年に「波照間島」を著すなど当時29歳で島おこしに活動的だったことで本紙から依頼された。

加屋本さんは、島で知り合い結婚した奥さんの出身地仙台に転居する83年まで3カ年通信員を務め「太陽の子ロケ始まる、波照間小児童が海上からふるさと巡り、藤仲沖縄開発庁振興局長に飲料水や医師確保など要請」などの記事を送稿した。

仙台移住後、「沖縄居酒屋」や「三線教室」を主宰するが、島を離れて一層ふる里への愛惜強く、衰退する島の伝統文化を守り継承する一助として、昨年「波照間島」の増補改訂版を出版した。約600㌻に及ぶ大著で島の歴史、産業、年中行事、祭祀儀礼などのすべてがほぼ網羅されている。

空港勤務で通信員

加屋本さんの後が84年から当時波照間空港事務所に勤務していた町役場職員の登野城景作さん（86）。大阪通信員を務めた喜一さんの実弟だ。

77年から99年の定年まで空港で勤務しており、90年から5、6年空白があるが、2001年まで通算10年ほど名前を伏せて匿名で務めた。

その間「トビウオ漁が最盛期、日本最南端の碑建立の飯島さん一家歓迎、波照間で初のジャズコンサート、公民館が恒例の教員ら新入住民合同歓迎会」などの記事をコンスタントに送稿した。

その登野城さんと同時期の89年ごろ通信員をしたのが当時31歳で学校事務職員の金嶺一彦さん（65）。現在は石垣在波照間郷友会長。本人によれば通信員は1、2年ほど務めたという。（元編集長・上地義男）

島の産業を理解しよう

島の農業を理解しよう－と黒糖づくりに挑戦する波照間中の生徒たち

生徒たちが黒砂糖づくりに挑戦

（波照間中）

PTA事業部が主催

「島の産業を理解しよう」と、波照間中学校PTA事業部（新城清喜部長）主催による、親子黒砂糖作りが十八日に実施された。

この日は、午後二時に学校へ集合し製糖工場を見学した後、校庭で黒砂糖作りに励んだ。

工場では、砂糖が出来るまでの工程を見学しながら、工場長より説明を受けた。

製糖工場よりキビのしぼり汁をもらい学年ごとに準備した釜で、温度調節をしながら撹拌し、長時間炊いた。

生徒たちは、初めて挑戦する砂糖作りに、真剣に取り組んだ。お父さんから昔の様子や出来上がったばかりの黒砂糖をほおばりながら楽しい一時であった。（波照間通信員）

移住女性が次々バトン

八重山毎日新聞 通信員列伝《24》

波照間

小平千歳さん 橋口恵利子さん 本明紅さん

犯人はカラスだった

青年海外協力隊に参加も

地元男性3人の後、波照間信員は移住の女性5人に支られている。うち4人は本から日本最南端の島に魅せられて訪れ、島でバイトなどをしているうちに通信員を依頼された方たちだ。

2001年から2カ年通信員を務めた小平千歳さんは、本土出身で民宿の手伝いや通信員をしている時に沖縄本島から来た波照間校教諭の阿波連さんという方と結婚して転出したという。

小平さんを引き継いだのが福岡出身の橋口恵利子さん(53)。民宿のヘルパーをしながら36歳の03年から通信員をしていたが、青年海外協力隊参加のため、06年に3カ年務めてやめた。

この間数多くの記事を送稿。その中の「カラスの財布盗難に観光客は注意を」の立て看板の記事は、その後日本新聞協会の「ハッピーニュース」大賞につながり、大きな話題となった。

04年11月、日本最南端の碑を訪れた女性観光客(30)の財布が自転車のかごからこつぜんと消えた。駐在さんが「島民が盗むはずはない」と調べたところ犯人はカラスだったというものだ。そして福井の62歳の女性が「その記事を読んで幸せな気持ちになった」と応募し大賞を受賞した。

橋口さんは2カ年ボリビアの青年海外協力隊に参加後、エルサルバドルのシニア海外ボランティアにも参加。帰国後は地元福岡のJOCA九州に勤務し、昨年退職するまでアフリカなど途上国の支援、発展に尽くした。

学校が通信員の感謝会

橋口さんの後が岩手出身の本明(小西)紅さん(59)。石垣在住。白梅短期大卒。波照間が好きで何度も通って1996年移住。通信員は43歳の2007年から匿名で2カ年務め、子どもの進学で島外に転出し退任した。

本明(小西)さんは主婦の傍ら童話や小説も執筆しており、石垣で保育士をしていた11年に第7回おきなわ文学賞小説部門で県知事賞を受賞。ほかに新風舎出版奨励賞、海洋文学大賞なども受賞した。

通信員終了後の09年には波照間小が、子どもたちの活躍を発信し、学習発表会でも脚本・演出などで協力したとして感謝会を催した。

(元編集長・上地義男)

日本最南端の碑前に看板を設置した波照間駐在所の伊藤竜之巡査部長(右)

波照間

「いたずらカラス」で立看板

"サイフ盗難"で観光客に注意

【波照間】観光客に「いたずらカラス」への注意を促す看板の設置式が九日午後、日本最南端の碑前で行われた。

先月、日本最南端の碑付近で観光客の女性が財布を盗まれ、犯人はカラスだったという事件が発生しており、その他にもカラスが人間の持ち物を狙う被害が増えている。これらの事を受け、観光客自身も注意してもらおうと、看板の設置に至った。

看板は波照間駐在所の伊藤竜之巡査部長の発案・制作で、すべて建築廃材での手作り。

伊藤巡査部長は「観光客が目で見て分かるように看板を作った。安心して観光ができ、笑顔で帰ってもらえれば」と話していた。

なおこの日は、先月のカラスによる財布盗難事件の取材でテレビ朝日のニュースショー「スーパーモーニング」(毎週月曜日から土曜日・午前八時から放送)の取材班が訪れ、最南端の島で起こったカラスによる珍事件を取材していた。

(橋口恵利子波照間通信員)

結婚し定住 島を伝える

八重山毎日新聞 通信員列伝《25》

波照間

本比田里奈さん 大泊君子さん

島のキビ農家と結婚

本明（小西）さんの後を引き受けたのが本比田里奈さん（49）。東京出身で早稲田大卒。1児の母。

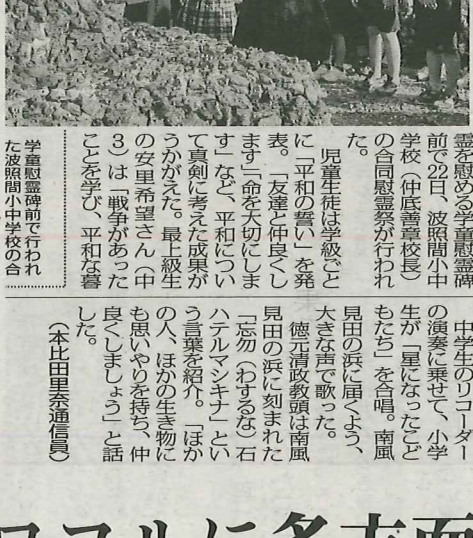
波照間には2002年ごろからたびたび通っていたが、民宿のヘルパーなどをしていた際、島の基幹作物のサトウキビを毎年250㌧前後も作る島の年下の農業青年と知り合い06年に32歳で結婚、定住した。そして09年から通信員を引き受けた。

最初のころは乳飲み子を抱えて取材は大変だったが、周りに支えられて18年まで9年間務めた。その間「南十字星に観光客らも感激、波照間で国内初の可動式風力発電稼働、仙台の加屋本正一さんがふる里ライブ、波照間製糖が新工場で操業開始、波照間小中の児童生徒らが学童慰霊碑に平和誓う」などの記事を精力的に送稿した。

里奈さんは現在、息子さんの進学のため東京に在住。島にいるときに通信教育で頑張って取得した教員免許で、夫の後押しを受けながら都内で教師をして息子さんをサポートしている。

学童慰霊碑に平和誓う

波照間小中学校



学童慰霊碑前で行われた波照間小中学校の合同慰霊祭

【波照間】太平洋戦争末期の1945（昭和20）年に西表島の南風見田の浜に退避させられ、マラリアの犠牲となった学童66人の御霊を慰める学童慰霊碑前で22日、波照間小中学校（仲底善章校長）の合同慰霊祭が行われた。

児童生徒は学級ごとに「平和の誓い」を発表。「友達と仲良くします」「命を大切にします」など、平和について真剣に考えた成果がうかがえた。最上級生の安里希望さん（中3）は「戦争があったことを学び、平和な暮らしがあることに感謝します」と誓った。

小学生は詩「いのち」を、中学生は自作の詩「大きな輪」を朗読し、「この島から手をつなごう」と呼びかけた。

中学生のリコーダーの演奏に乗せて、小学生が「星になったこどもたち」を合唱。南風見田の浜に届くよう、大きな声で歌った。

徳元清政教頭は南風見田の浜に刻まれた「忘勿（わするな）石ハテルマシキナ」という言葉を紹介。「ほかの人、ほかの生き物にも思いやりを持ち、仲良くしましょう」と話した。

（本比田里奈通信員）

パワフルに多方面で活躍

日本最南端の居酒屋

本比田さんを引き継いだのが石垣市白保出身で波照間嫁の大泊君子さん（65）。元教師で当時60歳の18年に引き受けて今年6年目になる。

この間「沖縄の観光意見発表で波照間小5年の本比田一朗君が優良賞、那覇の垣花小児童38人が波照間で交流、フェリーはてるまが30年の航海終える、波照間婦人学級が横笛教室、波照間製糖が学校や施設に出来立ての黒糖寄贈」などの記事を精力的に送稿した。

大泊さんが波照間に来たのは1985年の27歳の時に音楽教師としてだった。そこで当時波照間空港事務所に勤務していた高校の先輩と結婚、島に住むことになった。

夫の定年を機に君子さんも56歳前後で早期退職したが、島では唯一の習い事の書道塾やピアノ教室を30年以上続け、さらにおでんやそば、泡盛で日本最南端の居酒屋も営む傍ら、公民館や婦人会の役員、竹富町の社会教育委員なども務めた。

これらに加えて本紙通信員もこなし、不登校の支援もするそのパワフルな行動力で島の教育、観光など各方面に果たしている功績は大きい。

（元編集長・上地義男）

国境の島 あの人も執筆

八重山毎日新聞 通信員列伝《26》

与那国

外間守吉さん

通信員から政治家に

台湾とわずか110キロしか離れていない人口1700人の日本最西端の「国境離島」で最初に通信員を務めたのが、その後政治家として町長にまで上り詰めた外間守吉さん(75)だ。那覇の大学を卒業して帰郷し地元の福山海運で勤務していた1975年の26歳の時、本紙から依頼された。

当時沖縄の復帰運動を経験した世代は革新色が強く政治への関心が高かったが、外間さんも3年後の29歳の時革新系で町議に立候補、当選した。

結局通信員は78年の当選後まで約3年間務め、「沖教組与那国分会が少年野球大会、与教委250点の民俗資料集まる、与那国町に民芸センター、与那国にまたベトナム難民」などを送稿した。

政治の道に進んだ外間さんはその後議員3期、町長を4期務めた。その間町を二分して2016年に自衛隊を誘致したが沿岸監視だけのはずが当時の反対派の予想通りミサイル部隊などを増強の動きがあり、本人も戸惑いを見せているようだ。

台湾の小学生と交流

与那国町3小学校 オンラインで互いに紹介

【与那国】台湾花蓮縣のバロン小学校児童らと交流活動を続けている与那国、部良、比川の3小学校の年生が13日、オンラインビデオ会議システムを使して交流した。タバロン小校と6年生らが自校の教で、ディスプレーを通し互いに紹介するなど交流た。交流は今年で10年目。はじめに画面に映るタバン小学校の児童らがアミ語をレクチャー。歓迎の を披露した。与那国小は 国島を紹介。与那覇有希 は与那国フォーラムが行 事前学習で覚えた片言の 湾華語で自己紹介。タバロン児童らが手を振り打ち解けた。比川小も棒踊りを披露しタバロン側から拍手が送られた。

校歌ダンスを披露した久部良小は西崎の見える夕日や与那国馬、ハーリーのことをクイズを交え紹介。児童らは沖縄とタバロンの互いの遊びや学校設備の違いを確認した。

同交流は国際交流事業（町教委）で文化の違いを確かめ合うのがねらい。通訳は台湾留学経験のある前黒島萌さん（与那国出身）が総合進行を務めた。

児童らの交流は有意義だとする担当の町教委は「機器の接続が良好なら2月末ごろ再度オンラインで行いたい」と、次回の交流を計画しており、交流活動で、異文化への興味と交流促したい考えだ。

（田頭政英

通算30年の大ベテランも

田頭政英さん

娘にバトンタッチ

与那国通信員はその後は不明で、1986年に与那国町役場の田頭政英さん（79）が当時42歳で8年ぶりに匿名を条件に引き受けた。

大阪の新聞社に派遣のカメラマンで勤務後、本土復帰の72年に28歳で帰郷し、与那国町役場に入った。総務課在勤中に、新聞を町の広報に活用するねらいもあって当時の町長の勧めで引き受けたという。

その後父の介護のため役場も57歳で早期退職するなど98年から一度通信員も辞めていたが、2006年から再開し昨年12月に娘の瑠都さん(42)にバトンタッチするまで通算で約30年間を務めた。その間1994年に長間通信員の名前が見えるが詳細は不明。

再開後、田頭さんは名前入りで「フェリーよなぐにが21年で2000航海到達、韓国済州島と芸能交流、JTA撤退に外間町長が抗議、台湾花蓮市交流団85人が水上バイクで与那国入り」などを次々送稿した。

退職後、与那国いとなみネットワーク理事長や与那国方言辞典編集委員長などで島の伝統文化保全にも努めている。

（元編集長・上地義男）

父からタスキ 取材奔走

八重山毎日新聞 通信員列伝《27》

与那国 田頭瑠都さん

中学女子の制服製作

昨年暮れ、約30年も務めた父政英さんを継いだのが田頭瑠都さん（42歳）。祖納在住。

八重高から文化女子大家政学部服装学科で洋裁を学び、24歳で帰郷して「衣瑠都」をオープンした。地元の中学女子の制服を製作するなど洋裁業の傍ら、県紙沖縄タイムスの通信員も続け、さらに「走る」ことも趣味として与那国マラソンでは優勝の経験もあるようだ。

さっそく昨年12月から数々の記事を送稿してきており意欲的だ。かつて父の政英さんは「ネットで新聞を見たとスイスから連絡があり、その時自分が元気なうちは与那国のことを世界に発信していこうと感じた」と話していたが、瑠都さんもぜひそうして「国境の島」を元気づけてほしい。

台湾 松田良孝さん

台湾に関する著書多数

地方のローカル紙が台湾に通信員を配置するのは、台湾と八重山の密接な関係を象徴する事象といえる。これもひとえにその研究の第一人者である松田良孝さん（54）に負うところが大きい。

松田さんは元々本紙記者。埼玉出身で北海道大卒後十勝毎日新聞を経て最北から最南端の本紙に入社、23年間在籍した。

在職中から台湾と八重山、沖縄の歴史的関係に注目し、たびたび渡台して取材を重ね数多くの著書、共編著がある。

そのうち本紙に連載し著作化した「八重山の台湾人」「台湾疎開」「与那国台湾往来期」は沖縄タイムス出版文化賞、新聞労連ジャーナリズム大賞、南山舎やいま文化大賞をそれぞれ受賞した。

台湾政府外交部のフェローにも認定されているが、もう少し生活者目線で台湾を知るため拠点を移す決断をして2016年新聞社を退社。その際本社社長から通信員を依頼され、さらに本紙コラム「不連続線」の担当も依頼された。

「台湾有事」の懸念が強まる中、八重山3市町は2000万人超の台湾経済を取り込むため、高速船の実験事業や定期船開設などの計画、検討を進めている。今年で台湾通信員8年。台湾側からの時にシビアな視点の記事、コラムは興味深く読まれている。

（元編集長・上地義男）

（おわり）

台湾にも拠点 八重山深掘り

「石垣の塩」使用のパイ

台湾のやんばるフェスで販売

【台北】名護市など県北部の17業者・団体が特産品を販売する「かなさんどー琉球やんばるフェスタin台湾」（名護市商工会主催）が13、14日、台北市内で行われ、商品の企画・製造・販売を手掛ける琉球ワークス（岩月昭雄代表取締役社長、名護市大中）が「石垣の塩」を使ったチョコレート味のリーフパイなどを販売した。

岩月社長は「石垣の塩は、カルビーなど大手との取引があり、品質が安定している」と説明し、「台湾人が沖縄に対してどのようなものを求めているのか聞いて、今後に生かしていきたい」と話した。

イベントの様子は台湾の観光雑誌やネットメディアの関係者、ブロガーなどが取材。同社のブースではリーフパイを化粧箱から取り出してレンズを向ける姿が見られた。

（松田良孝通信員）

垣の塩を使ったリーフパイにカメラを向ける台湾ディアの関係者＝13日午後、台北市内の華山1914創園区